

胆嚢の mixed mesodermal tumor と S 状結腸癌との 同時性重複癌の 1 例

名古屋大学第 1 外科

長谷川 洋 鳥本 雄二 二村 雄次 弥政洋太郎

上飯田第 1 病院外科

小松 克己 福田 浩三

A CASE OF MIXED MESODERMAL TUMOR OF THE GALLBLADDER WITH SIGMOID COLON CANCER

Hiroshi HASEGAWA, Yuji TORIMOTO, Yuji NIMURA
and Yohtaro IYOMASA

First Dept. of Surgery, Nagoya University School of Medicine

Katsumi KOMATSU, Kohzo FUKUDA

Dept. of Surgery, Kami-iida Daiichi Hospital

索引用語：胆嚢癌肉腫，重複癌，S 状結腸癌

I. 結 言

最近われわれは、腹部単純 X 線写真で胆嚢に一致した石灰化陰影を認め、切除標本の病理組織学的検索で胆嚢の mixed mesodermal tumor と診断された 1 例を経験した。本例はまた S 状結腸癌との同時性重複癌でもあった。この極めてまれな 1 例につき若干の文献的考察を加えて報告する。

II. 症 例

症例：73歳，女。

主訴：血便。

家族歴：特記すべきことなし。

既往歴：48歳時虫垂切除術。57歳時腸閉塞手術。68歳時狭心症。

現病歴：昭和57年1月，血便にて他院受診。注腸検査，肝シンチにて肝転移を有する S 状結腸癌と診断され通院治療を受けていた。4月2日にイレウス状態となり上飯田第1病院受診，入院した。

入院時現症：体格・栄養中等度，黄疸・貧血なし。右上腹部に肝とは別に，可動性を有する，手拳大の石様に硬い腫瘍を触知した。

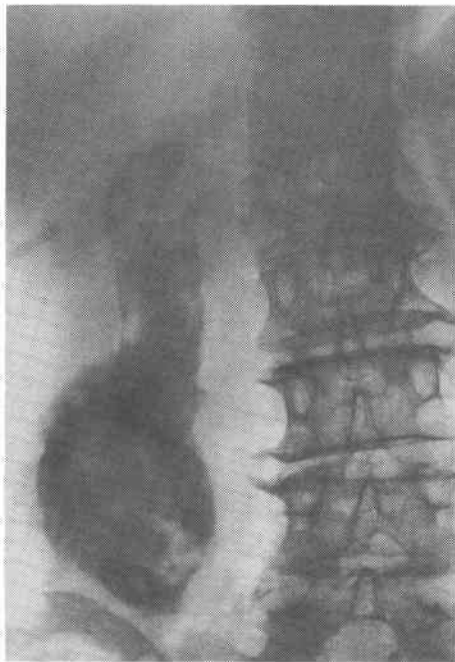
入院時一般検査成績：特記すべきことなし。

腹部単純 X 線写真：右上腹部の腫瘍に一致して，胆嚢と思われるナスビ型の石灰化陰影を認めた（図1）。

注腸造影：S 状結腸に apple core sign を認め，結腸

図1 腹部単純 X 線写真

右上腹部に胆嚢と思われる石灰化陰影を認める。



癌と診断した（図2）。

点滴胆道造影：総胆管に軽度の拡張と右方よりの圧排像を認めた。胆嚢管は造影されなかったが，胆内胆

図2 注腸造影

S状結腸に apple core sign (矢印の部) を認める。

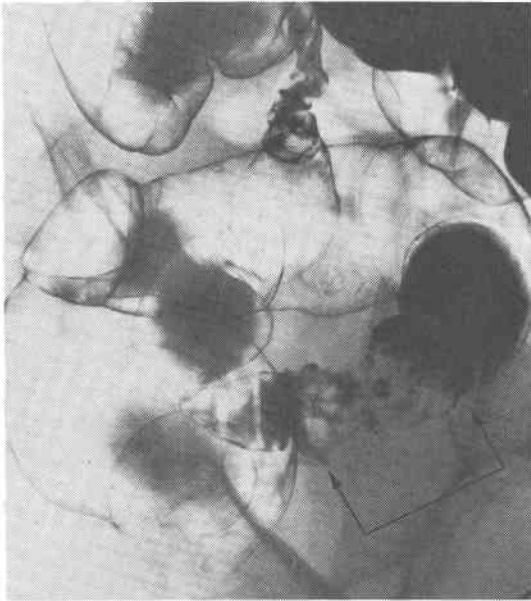


図3 摘出標本

胆嚢内腔は結節状の石灰化腫瘤で一塊となり、頸部にコ系石 (↘) と壁内転移 (←) 認める。

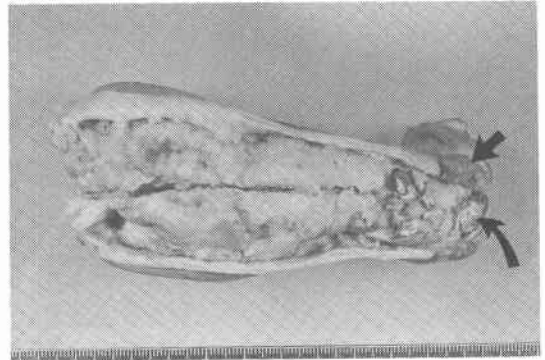


図4 S状結腸癌の病理組織像

中分化型腺癌で ss, ly₀, v₀であった。

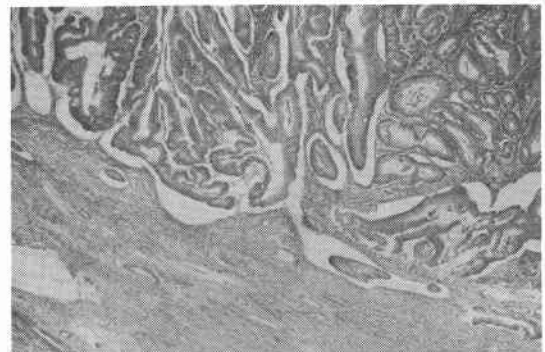
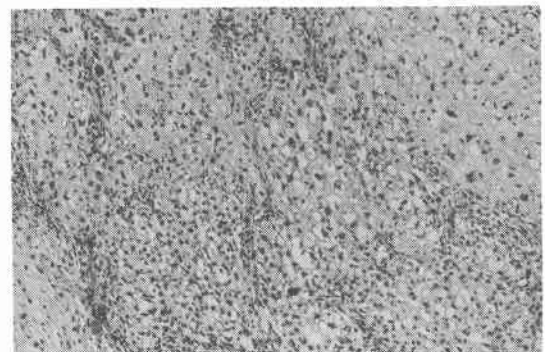


図5 内腔の腫瘤の病理組織像

a. 腫瘍の大部分はさまざまな分化度の軟骨肉腫で占められていた。



管には異常を認めなかった。

CT：胆嚢内腔全体を占める辺縁やや不整な石灰化像を認めた。肝臓には両葉に多数の転移巣を認めた。また、右腎には大きな cyst を認めた。

以上により、石灰化胆嚢および肝転移を有する S 状結腸癌と診断し、4月28日に手術を施行した。

手術所見：S状結腸癌は P₀N₁S₂ で、肝両葉に多数の転移巣を認めた。胆嚢は白色調で大きく石様に硬かった。S状結腸部分切除術、胆嚢摘出術を行った。

摘出標本肉眼所見：S状結腸癌は60×40mmで潰瘍限局型であった。胆嚢は130×50mmで石様に硬く、切開すると内腔は淡黄色、結節状の石灰化物質で一塊となり、頸部にはコ系石を多数認めた。内腔の石灰化物質は一部を除き剝離可能で、壁には石灰化を認めなかった。頸部には壁内転移と思われるアズキ大の転移巣を1個認めた(図3)。

病理組織所見：S状結腸癌は中分化型腺癌で ss, ly₀, v₀ であった(図4)。胆嚢内腔の腫瘤の脱灰標本では、腫瘍の大部分はさまざまな分化度の軟骨肉腫よりなり、腺癌の混在が認められた(図5 a)。上皮成分は未分化癌が主体で島状に配列するのが認められた(図5 b)。一部には明らかな腺管の形成を認めた。また著明な osteoid の形成を認めた(図5 c)。胆嚢壁は非薄化し signet ring cell を有する腺癌が筋層を越えて浸

潤増殖している像を認めた(図6)。壁内転移部は軟骨肉腫のみより成っていた。

患者は術後3カ月、癌性腹膜炎にて死亡した。再入

図 5b. 上皮成分の末分化癌が主体で島状に配列している。osteoid の形成を認める。

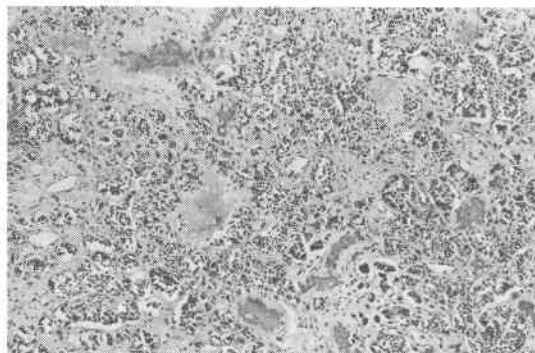


図 5c. 一部には明らかな腺管を形成して増殖する腺癌の像を認める。

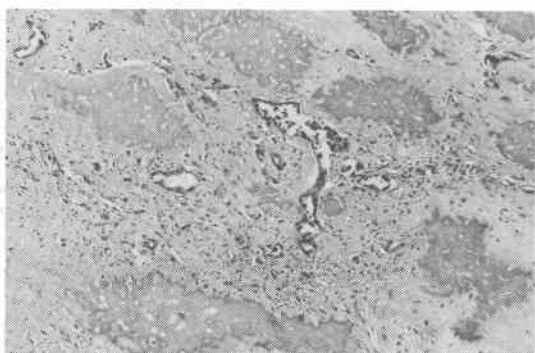
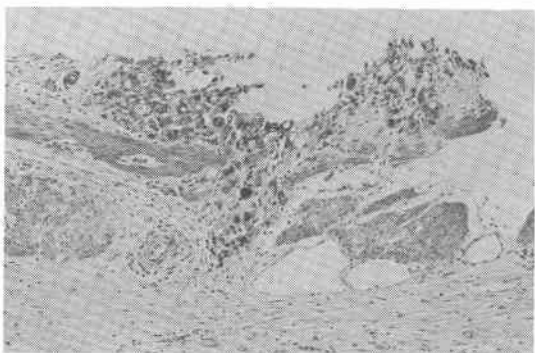


図 6 胆嚢壁の病理組織像

印環細胞を有する腺癌が筋層を越えて浸潤増殖している。



院時の腹部単純 X 線写真では、肝転移巣と思われる部位に石灰化陰影が認められたことより、肝転移は胆嚢癌から起こったものと考えられた (図 7)。

図 7 腹部単純 X 線写真
肝転移部に多数の石灰化陰影を認める (←)。



III. 考 察

胆嚢原発の悪性腫瘍は大部分が癌腫であり肉腫は極めてまれである。また、とくに癌肉腫はまれで、1907年の Landsteiner¹⁾の報告以来わずか15例の報告があるにすぎない。

癌肉腫は1つの腫瘍内に癌腫成分と肉腫成分とを持つ腫瘍である。1967年の Tanimura らの集計では、発生臓器としては子宮が最も多く、乳房がこれに次ぐが消化管は少ない。Meyer らは癌肉腫として、① Collision tumor, ② Combination tumor, ③ Composition tumor の3つをあげている。自験例について考えてみると、本例では上皮成分は腺癌、間質成分は軟骨肉腫より成り、この両者は互いに混在していて明らかな移行像が認められない点から collision tumor は否定的である。また、癌の肉腫様化あるいは癌腫が間質を刺激し間質が肉腫様になった場合には線維肉腫の像を呈することが多いといわれている。本例の間質成分はさまざまな分化度の軟骨肉腫であるので、こういった可能性も乏しい。Higgs²⁾らは4つの明らかに異なった組織より成る胆嚢の癌肉腫の1例を報告し、肝の mixed tumor との類似性によりその origin として multipotential blastoma の可能性を考え、malignant mixed tumor として報告している。本例の origin も Higgs らの例と同様のものと考えられる。

報告例には carcinosarcoma と mixed mesodermal tumor という2つの用語が使用されている。子宮の癌

表1 胆嚢の Mixed mesodermal tumor の報告例
胆嚢の Mixed mesodermal tumor の報告例

報告者	報告年度	年齢・性	主訴	胆石	病巣	転移部位	術式	予後
1. Kritsch	1925	59 ♀	—	(+)	—	リンパ節	—	—
2. Billi	1963	59 ♀	右季肋部痛	(-)	腫瘍型	—	胆摘	—
3. Edmondson	1967	—	—	—	—	—	—	—
4. Sági	1970	79 ♀	全身倦怠感	(+)	腫瘍型	肝臓 膵臓	胆摘	入院後 7日 +
5. Mehrotra	1970	45 ♀	右季肋部痛	(+)	腫瘍型	—	胆摘	4ヵ月 +
6. Higgs	1973	77 ♂	黄疸	(+)	腫瘍型	なし	胆嚢 総胆管切開	29日 +
7. Mansori	1980	81 ♀	右季肋部痛	(+)	腫瘍型	肝・膵 局浸(肝)	胆摘	2週 +
8. 長谷川	1983	73 ♀	血便	(+)	腫瘍型	肝	胆摘 S状結腸切開	3ヵ月 +

肉腫では Norris らは、骨・軟骨などその場所に存在しない heterologous な element を間質成分として持つ場合には mixed mesodermal tumor とし、homologous な場合には carcinosarcoma とする³⁾と述べている。同様の報告が多いが、用語の使いわけは必ずしも統一されていない。この定義に従い、胆嚢の mixed mesodermal tumor と考えられる報告例を集計すると、1925年の Kritsch⁴⁾の報告以来自験例を含め8例の報告があった^{2)4)~9)}(表1)。この8例の特徴をみると、性比は5:2、平均年齢が67.7歳と高齢者の女性に多い傾向を示し、一般の胆嚢癌と同様である。記載の明らかな例では病巣は全例が腫瘍型で、ほとんどの例が結石を合併している。また、手術時には肝その他に転移を有することが多く、予後は著しく不良である。

本例は腹部単純 X 線写真で胆嚢の石灰化陰影により発見された。乳腺、甲状腺などにおいては腫瘍内にしばしば石灰化が認められ、単純 X 線写真で腫瘍を発見する有用な手段となっているが胆嚢ではきわめてまれで1961年の Mooring¹⁰⁾の報告以来数例の報告があるに過ぎない。これらの石灰化陰影の特徴は、小斑点状ないし砂状と報告されているが、本例では胆嚢内腔全体を占める塊状の石灰化陰影であり、鑑別診断に迷ったが術前診断することはできなかった。

また本例は胆嚢と S 状結腸の同時性重複癌でも

あった。日本剖検輯報によると過去6年間に胆嚢との重複癌は253例の報告があり、臓器としては胃が50例と最も多く、以下甲状腺が26例、結腸・肺が各20例とこれに次ぎ、胆嚢との重複癌の中では比較的多い部類に属する。しかし、本例のごとき mixed mesodermal tumor と重複癌の報告は他に見当らなかつた。

IV. 結 語

腹部単純 X 線写真の石灰化陰影にて発見され、切除標本の病理学的検索にて mixed mesodermal tumor と診断されたきわめてまれな1例を報告した。本例はまた、S 状結腸癌との同時性重複癌でもあった。

文 献

- 1) Landsteiner K: Ueber das Sarkom der Gallenblase. Wien klin Wschr 17: 163—165, 1904
- 2) Higgs WR, Mocega EE, Jordan PH: Malignant mixed tumor of the gallbladder. Cancer 32: 471—475, 1973
- 3) Norris HJ, Taylor HB: Mesenchymal tumors of the uterus. A clinical and pathologic study of 31 carcinosarcomas. Cancer 19: 1459—1465, 1966
- 4) Kritsch: 7) より引用
- 5) Billi C: Su di un singolare caso di tumore della colecisti. Acta Chir Ital 22: 345—362, 1963
- 6) Edmondson HA: Tumor of the gallbladder and extrahepatic bile ducts. Atlas of tumor pathology, sect 7, fasc 26, Washington DC, Armed Forces Institute of Pathology, 1967, p79
- 7) Sági T, Gyori S: Über eine maligne Mischgeschwulst der Gallenblase. Zbl allg Pathol 116: 177—180, 1972
- 8) Mehrotra TN, Gupta SC, Naithani YP: Carcinosarcoma of the gallbladder. J Pathol 104: 145—148, 1971
- 9) Mansori KS, Cho SY: Malignant mixed tumor of the gallbladder. AJCP 73: 709—711, 1980
- 10) Mooring SL: Radiologic findings in primary carcinoma of the gallbladder. North Carolina Medical Journal 22: 592—600, 1961